2014-27006B

厚生労働科学研究費補助金
医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業

献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究

平成24－26年度　総合研究報告書

独立行政法人国立病院機構大阪医療センター
HIV/AIDS 先端医療開発センター長
白阪　琢磨

厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業

献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究

平成 24－26 年度　総合研究報告書

国立病院機構大阪医療センター
HIV/AIDS先端医療開発センター長

白阪　琢磨

目　　次

■ 総括研究報告

1 献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究……7

研究代表者：白阪　琢磨（国立大阪医療センター　HIV/AIDS先端医療開発センター）

■ 分担研究報告

2 供血者の実情調査と献血促進および阻害因子に関する研究……３５

研究分担者：大西　雅彦（平成24年度）/西田　一雄（平成25、26年度）（日本赤十字社　血液事業本部）

3 若者における献血意識と献血行動の促進および阻害因子に関する研究（平成24、25年度）…３９

献血推進の為の効果的な広報戦略等の閲覧に関する研究（平成26年度）

研究分担者：田辺　善仁（株式会社エフエム大阪　代表取締役社長）

4 輸血液の需要に関する研究

長崎大学医学部保健学科における献血・輸血についての意識調査……４７

研究分担者：秋田　定伯（長崎大学病院　形成外科）

5 献血推進に向けた研修方法に関する研究……５９

研究分担者：井上　慎吾（平成24、25年度）/瀧川　正弘（平成26年度）（日本赤十字社　血液事業本部）

6 献血率に与える要因分析と効果的な施策のあり方に関する研究……６３

研究分担者：河原　和夫（東京医科歯科大学大学院　政策科学分野）

7 献血推進施策の効果に関する研究 ……９１

研究分担者：田中　純子（広島大学　大学院医歯薬保健学研究院　疫学・疾病制御学）

総括研究報告

1 献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究

研究代表者：白阪　琢磨（国立大阪医療センター　HIV/AIDS 先端医療開発センター）
研究分担者：秋田　定伯（長崎大学病院　形成外科）
輸血液の需要に関する研究
−長崎大学医学部保健学科における献血・輸血についての意識調査−
大西　雅彦*、西田　一雄**（日本赤十字社　血液事業本部）
供血者の実情調査と献血促進および阻害因子に関する研究
井上　慎吾***（日本赤十字社　血液事業本部）
献血推進に向けた職員の研修方法に関する研究
瀧川　正弘****（日本赤十字社　血液事業本部）
献血推進に向けた研修方法に関する研究
田辺　善仁（株式会社エフエム大阪）
若者における献血意識と献血行動の促進および阻害因子に関する研究 [i]
献血推進の為の効果的な広報戦略等の閲覧に関する研究 [ii]
河原　和夫（東京医科歯科大学 大学院政策科学分野）
献血率に与える要因分析と効果的な施策のあり方に関する研究
田中　純子（広島大学 大学院医歯薬保健学研究院 疫学・疾病制御学）
献血推進施策の効果に関する研究−献血本数の推移と献血推進運動との関連
研究協力者：大平　勝美（社会福祉法人 はばたき福祉事業団）
柿沼　章子（社会福祉法人 はばたき福祉事業団）

*：平成 24 年度の研究分担者、**：平成 25、平成 26 年度の研究分担者、
平成 24、25 年度の研究分担者、*：平成 26 年度の研究分担者
[i]：平成 24、25 年度の研究課題、[ii]：平成 26 年度の研究課題

研究要旨

1. 献血液の需要と供給の推計研究　輸血液の今後の需要については、我が国は、今後、高齢化による疾病構造の変化や臓器移植の推進など、治療における輸血液の需要は、ますます高まると予測される一方で、若者を中心とした献血離れの傾向が指摘されており、今後、需要に見合った献血が確保されるかの検討は十分にされていない。本研究では、これまでの献血の実績に基づいた将来の献血者数・量の予測を行い、人口動態や疾患構造を踏まえ、必要な血液製剤の量、献血者数の将来予測を行った。2. 献血推進施策評価研究　前述のように輸血液の需要の増加にも拘わらず、供血者の減少、特に若年者層での献血離れの傾向が近年、指摘され、献血推進が重大な課題となっている。そのためにも献血推進については日本赤十字社を中心に、JFN（ジャパンエフエムネットワーク）など様々な関係者が多岐にわたる施策に取り組んでいるが、その効果は十分に検証されていない。先行研究では献血室に訪れた献血者や、大学祭などに参加する若者、さらに輸血を受けた患者へのアンケート調査によって部分的には明らかにでき、自治体別、月別、年代別、性別の献血数の詳細なデータ分析から献血推進施策との関連をある程度は類推が可能であったが、詳細な分析には至っていない。本研究では、多岐にわたる献血推進施策から主なものを抽出し、アンケート調査あるいは献血数（量）の推移との関連を調査し、施策の効果の検証を行った。3. 献血推進に影響を与える因子に関する研究　先行研究で献血の動機に博愛

精神があった。献血者にとって自分の献血がどう役立っているかを知ることは献血推進に繋がると予想され、輸血者による献血の評価の実態を調査した。さらに献血推進に繋がると予測される次の因子についても検討した。即ち、若者の献血意識、血液センターで献血に従事する職員の接遇向上、全国の学生献血推進ボランティアの活性化、献血経験者、未経験者の意識、行動の解析、献血者の居住地と献血場所の関係、自治体別・年齢階級別の標準化献血比の算定などである。これらを検討し献血推進に繋げる方策を示した。3年間の研究では、各研究分担は相互に連携を行った。

研究目的

本研究では 1) 献血者数および献血本数に関する将来推計および献血者の必要数（量）の将来予測、2) 主な献血推進施策の献血推進効果の評価、3) 献血推進に影響を与えると考えられる主要な要素に付き検討を行う。最終年度に結果を総合的に解析する。

研究方法および結果

本研究では、大きく3つの研究を実施した。1) 献血者数および献血本数に関する将来推計および献血者の必要数（量）の将来予測、2) 主な献血推進施策の献血推進効果の評価、3) 献血推進に影響を与えると考えられる主要な要素に付き検討を行う。具体的には、次の6つの研究を実施した。　研究分担1　輸血液の需要に関する研究−長崎大学医学部保健学科における献血・輸血についての意識調査−（秋田定伯）、研究分担 2　供血者の実情調査と献血促進および阻害因子に関する研究（西田一雄）、研究分担 3　献血推進に向けた研修方法に関する研究（瀧川正弘）、研究分担4献血推進の為の効果的な広報戦略等の閲覧に関する研究（田辺善仁）、研究分担 5　献血率に与える要因分析と効果的な施策のあり方に関する研究（河原和夫）、研究分担 6　献血推進施策の効果に関する研究−献血本数の推移と献血推進運動との関連性−（田中純子）の6研究を実施した。以下、各研究分担毎にまとめる。

研究分担1　献血・輸血に対して意識が高いと思われる医療職を目指す長崎大学医学部保健学科（看護科、理学療法科、作業療法科）を対象に平成24-26年度に、献血する側の若い世代に、アンケート調査を実施し、回答から献血・輸血の重要性の意識づけ、献血推進の広報活動となる行動変容の検討、被験者の属性、自由記載とともに、献血に対する認識を解析した。アンケート調査は本研究とは関係の無い授業終了後に実施し、回収した。調査対象者は平成24年395名、平成25年353名、平成26年391名で、回収率は各々92%、77.4%(但し、看護科は 95.8%)、85.19%であった。男性は平成24年が39.9%、平成25年が16.1%、平成26年が20.2%を占めた。年代は3年間ともに20代が最も多く、全体のおよそ60%を占め、次いで10代が30%前後、30代、40代の回答者もいた。献血回数は、未経験が平成24年は74.5%、平成25年は69.4%、平成26年は80.3%であり、1〜5回が各々21.2%、16.3%、16.1%、6回以上が各々3.6%、3.7%、2.8%であった。献血回数の経年変化は、平成24年に1年生だった者が平成26年には前年までの7名から14名に増加し、2年生だった者は3回以上の献血経験者が11名と増加した。「献血を敬遠するか」の質問に対して、平成24年は61.5%、平成25年が55%、平成26年は57.8%が「敬遠する」と回答した。献血を敬遠する理由は針の痛み、不安感、時間がかかる、恐怖心、場所が入りづらい が挙げられた。また、献血の経験者と未経験者では敬遠する理由が異なり、経験者で時間的な制限が最も多く、未経験者では不安、恐怖心、針に対する嫌悪などで理由の多くを占めた。

研究分担2　医学の進歩によって臓器移植が可能になるなど、治療における輸血用血液製剤の需要は高まり、特に、改正臓器移植法の施行に伴い緊急かつ大量輸血の事例が増加している。今後安全な血液を如何に安定的に確保するかが重要な課題である。厚生労働省が実施した若年層意識調査の結果及び検証を踏まえて検討された「献血推進のあり方に関する検討会」報告においても輸血用血液製剤の需要の増加にも拘わらず、若年層の献血離れの傾向に歯止めがかからないことが指摘されている。その理由が明らかにされていないことから、平成21年度から本研究において献血推進における広報の効果に関する研究を実施してきた。今後は、安全な輸血用血液製剤の安定的な確保のために、これまでの研究を踏ま

え、献血の実情を明らかにし、その原因の解明を行い、さらなる対策を提示することが重要と考えられた。

研究分担３　より安全な輸血用血液製剤を安定的に供給するためには、日常からより有効となる献血推進を展開する必要がある。近年は、特に若年層献血者が減少傾向にあり、献血離れの現象があることが指摘されており、同研究事業では「供血者の実情調査と献血促進及び阻害因子に関する研究」において、その原因の解明を行い、献血推進に向けた戦略的な広報の開発研究に取り組んでいる。一方で、広報展開も含めたより有効な献血推進を継続的に実施し、目標を達成するためには、職員や学生献血推進ボランティア等のスキル向上が不可欠であり、理想的な研修モデルを構築することが重要と考えた。

研究分担４　今後の若者献血行動の促進を行うために、献血に対する意識調査を実施。アンケートは若者が多く集まり、命の大切さを理解するというソーシャルライブ飲酒運転撲滅の為の「SDDライブ2014」にて実施し、本年の「SDDライブ2015」でも実施する。また、日本赤十字社とJFNグループで全国展開するLOVE in ACTIONのリスナーお便りやFM 大阪の独自の献血広報レギュラー番組と御堂筋献血ルームでの毎週土曜に開催されるミニライブにより、献血広報の効果的な在り方の検証を行った。

研究分担５　医療現場に安定的に血液製剤を供給するためには、献血者を増加させることが不可欠である。しかし、急速な少子化の中で献血者を増加していくことは難題である。献血者を増加させ、献血率を向上していくためには献血者の居住環境といった地域性や行動特性、性別、年齢、職業などの属性を科学的に分析し、地域性や献血者の行動特性、属性に応じた献血教育や献血に対する正しい知識の普及・啓発活動が関係者には求められている。平成24年度は、厚生労働省が行っている「平成23年若年層献血意識に関する調査」のデータを用いて献血経験者と献血未経験者の間の献血に対する意識や行動の差を比較した。その結果、献血呼びかけの広報媒体としては、「テレビ」で見たことがある場合は献血経験がない傾向、「献血ルーム前の看板・表示」「ポスターの掲示」「自治体の広報誌」で見たことがある場合は献血経験がある傾向であった。「テレビ」は必ずしも有効な広報媒体となっていない一方、特に「献血ルーム前の看板・表示」については大きな影響が見られた。また、家族が献血している姿を見たことがあるかについては、「ある」と回答した場合は献血経験がある傾向があった。このように家族が献血しているところを見たことがあるという経験は、献血行動に結びついていた。献血経験がある友人を有している場合と献血行動であるが、「いる」と回答した場合は献血経験が多くあり、「いない」と回答した場合は献血経験が少ないことが確認された。以上から、献血ルーム等の看板の設置場所や呼びかける職員が待機する場所などを工夫することにより、新たな献血者の発掘が可能になることがわかった。また、家族や友人の献血している姿を「見たことがある」者は献血行動をとりやすいことから、これら身近な人間を介して献血思想を普及していく方策を考えることも重要であるという結果が得られた。平成25年度研究では、日本赤十字社の全国統一コンピュータシステムから2010年の1年間に全国の献血実施場所を訪れた献血者データをもとに分析したもので、地域の実情などに応じた献血推進の在り方を提示した。大都市圏を中心とした都道府県域を越えた献血者移動の状況や移動の主体となる職種や年齢、県外献血への寄与が高い曜日などの属性も明らかとなった。また、全国の自治体の年齢階級別の献血率も示された。これらの研究結果から、献血率の向上のためには、大都市部圏とそれ以外のところでは献血の普及啓発活動を同一の手法で行えば効果は期待できないこと、特に3大都市圏では、都道府県の血液センターや自治体を越えた献血者の流出入状況に応じた献血推進活動を行う必要があることが分かった。併せて、年齢階級や大学生、会社員、公務員などに対する呼びかけと高校生や主婦、そして自営業者に対する呼びかけには差異を持たせる必要がある。電鉄会社と組んだPRの仕方も必要であろう。また、全国の自治体別・年齢階級別の“標準化献血比”を算定したが、これは地域の血液センターや自治体の献血推進担当者にとり、各々が担当しているところの献血状況を把握する上で有用であり、今後の科学的データに基づいた献血推進活動の実践に多大なる貢献を果たすものと考えている。同時に、血液センターや自治体の献血担当者が根拠見基づいて

如何なる献血推進活動を行っていくか、その分析と政策としての体系化が今後の課題となる。

研究分担６　本研究では、平成24年度に「献血者数および献血本数に関する将来推計の試み」、平成25年度に「献血行動の変化を考慮した総献血本数の推移予測（供給）と将来推計人口に基づく血液製剤に必要な献血本数推移予測（需要）との比較」、平成26年度に「献血本数の推移と献血推進運動との関連性」を行った。1）「献血者数および献血本数に関する将来推計の試み」では、2 種類の献血行動推移確率（①平成 18-19 年度（献血本数が減少傾向）、②平成20-21年度（献血本数が増加傾向））を算出し、献血行動推移確率に基づいて献血本数の将来推計を行った。以上から次の結果を得た。1. 中高齢層の献血者は献血行動が習慣化しているが、若年層は習慣化していない。2. ①平成18-19年度の「献血減少」行動に基づく推定献血本数よりも②平成 20-21年度「献血増加」行動による予測のほうが、年間50-60 万本上回る。しかし、いずれの予測値も初年度から2-3年後に減少に転じる。 3. 性・年齢階級別に、2 種類の献血本数推移の予測を比較すると、40歳代・50歳代では2つの予測値に差がみられ、献血行動に変化が生じ献血を行うようになったと考えられるのに対し、本来献血推進運動のターゲットである20歳代や30歳代ではほとんど違いがみられず、効果が得られていないことが明らかになった。 2）「献血行動の変化を考慮した総献血本数の推移予測（供給）と将来推計人口に基づく血液製剤に必要な献血本数推移予測（需要）との比較」では、平成24年度の献血本数の推定（供給）に加えて、将来推計人口、年代別輸血用血液製剤使用率を元に、将来必要とされる血液製剤別推定必要本数を推計した。さらに、検査不合格などを見込んだ献血本数に換算し、推計必要献血本数を算出した。その結果、1. 推定献血本数は平成 20(2008)年度 502 万本から増加し平成 24(2012)年度 526 万を境に減少に転じ平成35(2023)年度には488万本、平成39(2027)年に466万本、平成 42(2030)年に 450 万本、平成 52(2040)年に387万本、平成62(2050)年に335万本と単調に減少する。2. 推定必要献血本数は平成 25(2013)年542万本から毎年増加し、平成39(2027)年において567万本で最大となった。3. 上記2つの（供給）および（需要）献血本数推計値より、不足分を推定すると、平成 25(2013)年以後、毎年増加し、平成25(2013)年17万本、平成32(2020)年53万本、平成35(2023)年75万本、平成39(2027)年101万本、平成42(2030)年115万本、平成52(2040)年151万本、平成62(2050)年167万本と献血本数不足分は増加推定されることが明らかになった。3）「献血本数の推移と献血推進運動との関連性」では、平成 18 年 4月1日から平成26年3月31日までの全献血についての資料を基に、1）Love in Action イベントの実施月と月別献血本数の推移との関連性、 2）献血本数の将来予測と実測値の比較の2項目につき解析・検討を行った。その結果、1. Love in Action イベントの実施月と月別献血本数の推移との関連性について、都道府県別にまず並べて検討したが、明らかな関連性はみられなかった。しかし、Love in Actionの行われた月と献血本数との関連性を、年度と月を調整して、多変量解析をしたところ、「Love in Actionの行った」は行わない場合よりも有意に「献血本数」が 0.8%増加することが明らかとなった。2. 平成24-25 年度に示した献血本数の将来予測による予測値と実測値との比較した結果、平成20-21(2008-09)年度の「献血増加」行動に基づく将来予測値よりも実際は減少し、平成18-19(2006-07)年度の「献血減少」行動に基づく将来予測値よりも実際は増加していた。これは、平成18年度以降献血行動が活動的になっているが、平成23年以降には下がったと考えられた。この要因を検討するために、平成20－25年度の年間献血本数を出生年別に算出するし、推移を比較すると、若年層（1980 年代以降出生）は 19 歳をピークに、1960年代生まれは2012年以降、1950年代生まれは2009-10年以降献血が減少していることなどが明らかになった。

結論

本研究では 1）献血者数および献血本数に関する将来推計および献血者の必要数（量）の将来予測、2）主な献血推進施策の献血推進効果の評価、3）献血推進に影響を与えると考えられる主要な要素に付き検討を行い、最終年度に総合的に解析を行った。3 年間で当初の研究目標をほぼ達成できた。

業績

白阪琢磨

(1) 論文発表

1. Katano H, Hishima T, Mochizuki M, Kodama Y, Oyaizu N, Ota Y, Mine S, Igari T, Ajisawa A, Teruya K, Tanuma J, Kikuchi Y, Uehira T, Shirasaka T, Koibuchi T, Iwamoto A, Oka S, Hasegawa H, Okada S, Yasuoka A. The prevalence of opportunistic infections and malignancies in autopsied patients with human immunodeficiency virus infection in Japan. BMC Infect Dis. 14:229. Published online 2014

2. Yajima K, Uehira T, Otera H, Koizumi Y, Watanabe D, Kodama Y, Kuzushita N, Nishida Y, Mita E, Mano M, Shirasaka T: A case of non-cirrhotic portal hypertension associated with anti-retroviral therapy in a Japanese patient with human immunodeficiency virus infection. J Infect Chemother. 20(9):582-5, 2014

3. Ogawa Y, Watanabe D, Hirota K, Ikuma M, Yajima K, Kasai D, Mori K, Ota Y, Nishida Y, Uehira T, Mano M, Yamane T, Shirasaka T. Rapid multiorgan failure due to large B-cell lymphoma arising in human herpesvirus-8-associated multicentric Castleman disease in a human immunodeficiency virus-infected patient. Intern Med. 253(24): 2805-9, 2014

4. Shimamoto Y, Fukuda T, Tominari S, Fukumoto K, Ueno K, Dong M, Tanaka K, Shirasaka T, Komori K : Decreased vancomycin clearance in patients with congestive heart failure. Eur J ClinParmacol 69(3)449-457, 2013

5. Tominari S, Nakakura T, Yasuo T, Yamanaka K, Takahashi Y, Shirasaka T, Nakayama T : Implementation of mental health service has an impact on retention in HIV care: a nested case-control study in a Japanese HIV care facility. PLOS ONE 8(7)1-6, 2013

6. Watanabe D, Otani N, Suzuki S, Dohi H, Hirota K, Yonemoto H, Koizumi Y, Otera H, Yajima K, Nishida Y, Uehira T, Shima M, Shirasaka T, Okuno T: Evaluation of VZV-specific cell-mediated immunity in adults infected with HIV-1 by using a simple IFN-γ release assay. J Med Virol 85(8)1313-20, 2013

7. Yoshino M, Yagura H, Kushida H, Yonemoto H, Bando H, Ogawa Y, Yajima K, Kasai D, Taniguchi T, Watanabe D, Nishida Y, Kuwahara T, Uehira T, Shirasaka T : Assessing recovery of renal function after tenofovir disoproxil fumarate discontinuation. J Infect hemother, 18(2):169-74, 2012

8. Fujisaki S, Yokomaku Y, Shiino T, Koibuchi T, Hattori J, Ibe S, Iwatani Y, Iwamoto A, Shirasaka T, Hamaguchi M, Sugiura W. Outbreak of Infections by Hepatitis B Virus Genotype A and Transmission of Genetic Drug Resistance in Patients Coinfected with HIV-1 in Japan. J ClinMicrobiol, 50(4):1507, 2012, Corrects: J Clin Microbiol. 2011 March;49(3):1017-24

9. Shimamoto Y, Fukuda T, Tominari S, Fukumoto K, Ueno K, dong M, Tanaka K, Shirasaka T, Komori K: Decreased vancomycin clearance in patients with congestive heart failure. Eur J ClinPharmacol. [Epub ahead of print], 2012

10. Watanabe D, Yoshino M, Yagura H, Hirota K, Yonemoto H, Bando H, Yajima K, Koizumi Y, Otera H, Tominari S, Nishida Y, Kuwahara T, Uehira T, Shirasaka T : Increase in serum mitochondrial creatine kinase levels induced by tenofovir administration. J Infect Chemother.; 18(5):675-82, 2012

11. 白阪琢磨:抗HIV用薬。治療薬ハンドブック2015、株式会社じほう、2015

12. 白阪琢磨:座談会「新しい治療ガイドライン−HIV初感染・妊婦の治療、職業的HIV曝露時の感染予防も含めて−」、HIV 感染症と AIDS の治療 5(1)4-12, 2014

13. 矢嶋敬史郎、白阪琢磨:連載エイズに見られる感染症と悪性腫瘍 (9) サルモネラ菌血症。「化学療法の領域」30(7), 2014

14. 白阪琢磨:特集2「新規HIV感染者は過去2位。新規AIDS患者は過去最多。伸び率が高いのは、50代以上です」。健 43(9)22-23, 2014年

15. 吉岡巌、金宮健翁、木下竜弥、鄭則秀、原田泰規、上平朝子、白阪琢磨、岡聖次:抗HIV薬Atazanavir内服患者に発生した尿路結石症の検討。泌尿器外科 27(11):1823-1827, 2014

16. 白阪琢磨:第4章治療と管理・対応「抗 HIV-1療法: いつ、どのように開始するか」。最新医学別冊「新しい診断と治療のABC 65HIV感染症とAIDS改訂第2版」, 2014

17. 白阪琢磨:エイズ治療の理解へシンポ。中日新聞12版P.24, 2014

18. 白阪琢磨:抗HIV用薬。治療薬ハンドブック2014、株式会社じほう、2014

19. 白阪琢磨:第6回市民公開シンポジウム「エイズ無き時代を目指して〜過去から未来へ〜」。 中日新聞P.9, 2014

20. 白阪琢磨:HIV感染症の長期的治療戦略3. 治療処方の単純化の動向、化学療法の領域 29(9)45-52, 2013

21. 白阪琢磨:中高年にエイズが急増中「死ぬまでSEX」の危険、AERA 26(42)58-59, 2013

22. 白阪琢磨:DVD「温故知新〜薬害から学ぶ〜DVDシリーズ⑤薬害エイズ事件」インタビュー出演。一般財団法人医薬品医療機器レギュラトリーサイエンス財団薬害教育映像コンテンツ、2013

23. 白阪琢磨:中学・高校生に知ってほしいHIV/AIDS知識、中学保健ニュース 1577号付録1-1, 2013

24. 白阪琢磨:きょう世界エイズデー HIV 検査中高年敬遠「自分とは関係ないものだと…」、産経新聞14版P.22, 2013

25. 白阪琢磨:抗ウイルス療法の現状と今後の展望「抗HIV薬」、臨床と微生物 40(1)21-28、近代出版、2013

26. 白阪琢磨:抗HIV用薬、治療薬ハンドブック2013、株式会社じほう、2013

27. 白阪琢磨:談論誘発若者の献血離れ「奉仕の心」が動機 親や先輩が献血の模範を、東京新聞第25212号、P.23、2013

28. 白阪琢磨:「生活・医療」HIV 早めの治療にシフト、朝日新聞10版、2012

29. 白阪琢磨:ラルテグラビルの特徴と使い方、メディカル朝日 41(4)27-29、朝日新聞社、2012

30. 満屋裕明、島尾忠男、白阪琢磨、立川夏夫:治療と予防—ARTが画する新時代—座談会、 HIV感染症とAIDSの治療 3(1)4-11、㈱メディカルレビュー社、2012

31. 白阪琢磨:「カルテの余白に」薬害患者救命私の責務、読売新聞13版P.16、2012

32. 白阪琢磨:「カルテの余白に」患者と息長いつきあい、読売新聞13版P.14、2012

33. 白阪琢磨:「カルテの余白に」HIV 感染治癒の日信じて、読売新聞13版P.18、2012

34. 吉野宗宏、矢倉裕輝、櫛田宏幸、米本仁史、廣田

和之、坂東裕基、矢嶋敬史郎、小泉祐介、大寺博、富成伸次郎渡邊大、桑原健、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨：当院における1日1回投与ダルナビル／リトナビルの使用成績、日本エイズ学会誌14：141-146、2012

35. 白阪琢磨：増え続けるHIV/AIDS感染者・患者数日本の新規AIDS患者は過去最多に･･･！教育現場で、より関心を持たせることが望まれます、健12(41)20-21、株式会社日本学校保健研修社、2012年

36. 木村哲、満屋裕明、白阪琢磨他（HIV感染症治療研究会）：HIV感染症「治療の手引き」第16版、2012

(2) 発表

1. 大石真世、秋田智之、海嶋照美、白阪琢磨、田中純子：献血本数から見た献血行動の推移確率の推定と献血者数の将来予測、第72回日本公衆生学会総会(三重)、10月2013年

2. 白阪琢磨：輸血療法とHIVについて。大阪府第15回輸血療法委員会会議講演、大阪、3月2015年

秋田定伯

(1) 論文発表

1. Akita S: Guest editorial: WUWHS 2012 – Bettercare, better life. Journal of Wound Care 21: 357, 2012

2. Akita S: Better care, better life. International Journalof Lower Extremity Wounds 11: 76, 2012

3. Akita S, Yoshimoto H, Akino K, Ohtsuru A, Hayashida K, Hirano A, Suzuki K, Yamashita S:Early Experiences with Stem Cells in TreatingChronic Wounds. Clinics in Plastic Surgery 39:281-292, 2012

4. Hikida M, Tsuda M, Watanabe A, Kinoshita A, Akita S, Hirano A, Uchiyama T, Yoshiura, K.-I:No evidence of association between 8q24 andsusceptibility to nonsyndromic cleft lip withor without palate in Japanese population. CleftPalate-Craniofacial Journal 49: 714-717, 2012

5. Oashi K, Furukawa H, Akita S, Nakashima M, Matsuda K, Oyama A, Funayama E, Hayashi T, Hirano A, Yamamoto Y: Vascularized fat flapslose 44% of their weight 24 weeks aftertransplantation. Journal of Plastic, Reconstructiveand Aesthetic Surgery 65: 1403-1409, 2012

6. Akita S, Yoshimoto H, Ohtsuru A, Hirano A, Yamashita S: Autologous adipose-derivedregenerative cells are effective for chronicintractable radiation injuries. RadiationProtection Dosimetry 151: 656-660, 2012

7. Hayashida K, Akita S: Quality of pediatricsecond-degree burn wound scars following theapplication of basic fibroblast growth factor:Results of a randomized' controlled pilot study. Ostomy Wound Management 58: 32-36, 2012

8. Kinoshita N, Tsuda M, Hamuy R, Nakashima M, Nakamura-Kurashige T, Matsuu-Matsuyama M, Hirano A, Akita S: The usefulness of basicfibroblast growth factor for radiation-exposedtissue. Wound Repair and Regeneration 20:91-102, 2012

9. Akita S: Surgical management of pressure ulcers. In "Surgical wound healing and management, Second Edition"(Eds.) Mark S. Granick and Luc Teot, pp143-154, Informa Healthcare, London, 2012

10. Akita S, Yoshimoto H, Akno K, Ohtsuru

A, Hayashida K, Hirano A, Suzuki K, Yamashita S:Mecenchymal stem cell therapy in localradiation injuries: A jaoanese approach. In"The Medical Basis for Radiation-Accident Preparedness" (Eds.) Christensen DM, SugarmanSL and O'Hara FM, pp 121-132, Oak RidgeAssociated Universities, Oak Ridge, USA, 2013

11. Hamuy R, Kinoshita N, Yoshimoto H, HayashidaK, Houbara S, Nakashima M, Suzuki K, MitsutakeN, Mussazhanova Z, Kashiyama K, Hirano A, AkitaS: One-stage, simultaneous skin grafting withartificial dermis and basic fibroblast growthfactor successfully improves elasticity withmaturation of scar formation. Wound Repair andRegeneration 21: 141-154, 2013

12. Hayashida K, Fujioka M, Saijo H, Morooka S, Kuwabara K, Akita S: bFGF treatment in burnsand surgical wounds. The Journal of WoundTechnology, 22: 6-8, 2013

13. Akita S, Houbara S, Akatsuka M, Hirano A:Vascular anomalies and wounds. Journal ofTissue Viability 22: 103-111, 2013

14. Akita S: Basic fibroblast growth factor inscarless wound healing. Advances in Wound Care2: 44-49, 2013

15. Akita S, Yoshimoto H, Yamanobe Y, Murakami R:Post-operative management by telemetry/ tele-medicine system. Journal of Wound Technology 20:16-18, 2013

16. Akita S: Editorial. Journal of Wound Technology22: 3, 2013

17. Akita S, Houbara S, Hirano A: Management of vascularmalformations. Plastic and Reconstructive Surgery-GO2: e128, 2014

18. Tanaka K, Akita S, Yoshimoto H, Houbara S, Hirano A: Lipid-colloid dressing showsimproved reepithelialization, pain relief, andcorneal barrier function in split-thicknessskin-graft donor wound healing. InternationalJournal of Lower Extremity Wounds 13: 220-225, 2014

19. Houbara S, Akita S, Yoshimoto H, Hirano A:Vascular malformations that were diagnosed as oraccompanied by malignant tumors. DermatologicSurgery 40: 1225-1232, 2014

20. Akita S: Treatment of Radiation Injury. Advances in Wound Care 3: 1-11, 2014

21. Akita S, Akatsuka M: Surgical debridement. In "Skin Necrosis" (Eds.) Teot L, Meaume S, DelMamol V, Akita S, Ennis WI, pp 19-24, Springer-Verlag, Heidelberg

22. Murakami C, Fujioka M, Akita S: How to manageradiation injuries. In "Skin Necrosis" (Eds.)Teot L, Meaume S, Del Mamol V, Akita S, EnnisWI, pp 71-74, Springer-Verlag, Heidelberg

23. Akita S: Infection Context: Necrotizing fasciitis. In "Skin Necrosis"(Eds.) Teot L, Meaume S, Del MamolV, Akita S, Ennis WI, pp 83-87, Springer-Verlag, Heidelberg

24. Hayashida K, Fujioka M, Murakami C, Akita S:Toxic syndromes. In "Skin Necrosis"(Eds.) TeotL, Meaume S, Del Mamol V, Akita S, Ennis WI, pp105-108, Springer-Verlag, Heidelberg

25. Akita S, Houbara S, Akatsuka M: Imaging, vascular assessment: Extension in depth andvascular anomalies. In "Skin Necrosis" (Eds.) Teot L, Meaume S, Del Mamol V, Akita S, EnnisWI, pp 257-263, Springer-Verlag, Heidelberg

26. 吉本浩、秋田定伯、平野明喜：肥厚性瘢痕・ケロイドの非手術的治療-圧迫療法、ステロイド局所注射など、創傷のすべて、市岡滋（監修）、安部正敏、溝上祐子、寺師浩人（編集）、pp 347-349、克誠堂出版、東京、2012

27. 小川令、赤石諭史、秋田定伯、土佐泰祥、山脇聖子、岡部圭介、長尾宗朝、山本純：疵痕・ケロイド治療研究会ケロイド・肥厚性傷跡分類・評価表作成ワーキンググループ：ケロイド・肥厚性瘢痕の分類・評価ケロイド・肥厚性瘢痕分類・評価表 2011 JSW Scar Scale 2011. 瘢痕・ケロイド治療ジャーナル 6: 19-22, 2012

28. 秋田定伯、赤塚美保子、芳原聖司、平野明喜：【血管腫・血管奇形治療マニュアル】血管奇形の硬化療法. PEPARS 71, 44-52, 2012

29. 林田健志、平野明喜、秋田定伯：【研修医・外科系医師が知っておくべき形成外科の基本知識と手技】創傷に対する新しい治療法の理論と実際線維芽細胞増殖因子(bFGF). 形成外科 55:S288-S290, 2012

30. 秋田定伯、平野明喜：【形成外科治療に必要なくすりの知識】術後感染予防薬の投与タイミング・投与期間と形成外科領域の感染制御. PEPARS70: 1-8, 2012

31. 力久直昭、小坂健太朗、松井裕輔、三村秀文、大須賀慶悟、秋田定伯、渡部茂、佐々木了：血管腫・血管奇形の全国疫学調査に向けての予備調査結果の報告重症度と難治性の分析. 日本形成外科学会会誌 33: 583-590, 2013

32. 秋田定伯：【創傷の急性、亜急性、慢性、難治性をどう定義するか】急性創傷、慢性創傷は時間因子のみでは規定されていない. 創傷 4:135-139, 2013

33. 秋田定伯、平野明喜：【創傷の評価と治療法の選択】創傷の定義. 形成外科 56: 901-905, 2013

34. 秋田定伯：【人工真皮の update(今後の展望)】人工真皮の update 脂肪幹細胞との併用効果. 創傷 4: 73-80, 2013

35. 松井裕輔、三村秀文、大須賀慶悟、秋田定伯、渡部茂、力久直昭、田中純子、森井英一、高倉伸幸、佐々木了：血管腫・血管奇形の全国実態調査に向けての予備調査結果の報告. IVR:Interventional Radiology 29: 62-67, 2014

36. 秋田定伯:ケロイド・肥厚性瘢痕の評価・分類- 国際比較 -、傷あとケロイドはここまで治せる、小川令（編集）、8 頁、in press、克誠堂出版、東京

37. 秋田定伯：創傷治癒、TEXT 形成外科学第 3 版、波利井清紀（監修）、中塚貴志、亀井譲（編集）7 頁、in press、南山堂、東京

(2) 学会発表

1. Akita S: Human recombinant basic fibroblastgrowth factor improves scar quality such assoftness and color-match as well as accelerateswound healing in traumas, burns, surgical woundand diabetic foot ulcers. A Japanese experience. 4th international workshop on wound technology, lecture, Paris, January, 2012

2. Akita S: Introduction to the world union ofwound healing societies 2012, importantkick-off of transcontinental wound registry. 4th international workshop on wound technology, lecture, Paris, January, 2012

3. Akita S, Murakami R: Versatility of thin groinflap for intractable wounds and scarcontracture. 4th international workshop onwound technology, lecture, Paris, January, 2012

4. Akita S: What's New in the world of Wound Care. 1st annual meeting of Philippine Wound

careSociety, invited lecture, Manila, Philippine, February, 2012

5. Akita S: Message from the WUWHS-Role of NationalSociety in international collaboration. 1st annualmeeting of Philippine Wound care Society, invitedlecture, Manila, Philippine, February, 2012

6. Akita S: Autologous adipose-derived regenerative(stem) cell therapy in chronic radiation injury. 2ndCell Society meeting, invited lecture, La Jolla, California, February, 2012

7. Akita S, Hayashida K, Yoshimoto H, Akino K, Yakabe A, Hirano A: Biology of wound healing. British Limb Reconstruction Society, invitedlecture, Hull, UK, March, 2012

8. Hamuy R, Kinoshita N, Yoshimoto H, Hayashida K, Houbara S, Nakashima M, Hirano A, Akita S:Simultaneous artificial dermis, basicfibroblast growth factor and skin graftingresult in successful graft take and improvedtissue texture. SAWC/WHS annual meeting, Georgia, Atlanta, April, 2012

9. Akita S, Yoshimoto H, Akino K, Kinoshita N, Hamuy R, Ohtsuru A, Hayashida K, Hirano A:Cytokine and Mesenchymal stem and regenerativecell therapy in local radiation injuries- AJapanese Approach. The 11th Japan-Korea Congressof Plastic and Reconstructive Surgery, paneldiscussion, Awaji, Hyogo, Japan, May, 2012

10. Akita S: Clinical trend in wound care-Clinicalexperiences of difficult wound healing by usingbasic fibroblast growth factor and Terudermis. 1stAsia Pacific Wound Congress, invited lecture, Kuala Lumpur, June, 2012

11. Akita S: Role of stem cells in wound care-Autologous adipose-derived stem cell therapyin local radiation injuries, Crohn's disease, Buerger's disease and ulcerative colitis. 1stAsia Pacific Wound Congress, invited lecture, Kuala Lumpur, June, 2012

12. Akita S: The ideal perspectives for woundhealing reimbursement-Opening Symposium, World Union of Wound Healing Societies, Yokohama, Japan, September, 2012

13. Akita S: Clinical practice guideline ondiabetic ulcer management. Certificate course, 9th Asia Pacific conference on diabetic limbproblems, invited lecture, Hong Kong, November, 2012

14. Akita S: Diabetic foot care-Japan's perspective. 9thAsia Pacific conference on diabetic limb problems, invited lecture, Hong Kong, November, 2012

15. Akita S: Role of autologous stem cells in DMand related intractable chronic wounds. 9th AsiaPacific conference on diabetic limb problems, invited lecture, Hong Kong, November, 2012

16. Akita S: Role of growth factor/cytokine indiabetic wound healing. 9th Asia Pacificconference on diabetic limb problems, invitedlecture, Hong Kong, November, 2012

17. 秋田定伯、吉本浩、芳原聖司、林田健志、平野明喜：【人工真皮の update】脂肪幹細胞との併用効果. 第4回日本創傷外科学会、パネルディスカッション、福岡、7月、2012年

18. 吉本浩、木下直江、Hamuy R、芳原聖司、林田健志、中島正博、秋田定伯、平野明喜：【創傷治癒の再生医療への応用】サイトカインと人工真皮及び

自家皮膚の同時植皮の検討. 第4回日本創傷外科学会、ミニシンポジウム、福岡、7月、2012年

19. 秋田定伯、平野明喜：【創傷の急性、亜急性、慢性、難治性をどう定義するか】急性創傷、慢性創傷は時間因子のみでは規定されていない. 第4回日本創傷外科学会、特別シンポジウム、福岡、7月、2012年

20. Akita S: Vascular anomalies: it etiology andwound management with minimal invasiveultrasonic-assisted therapy. 5th InternationalWorkshop of Wound Technologies, lecture, Paris, January, 2013

21. Akita S: Therapeutic role of autologous stemcells in intractable chronic Wounds. 2nd annualmeeting of Philippine Wound Care Society, invited lecture, Manila, Philippine, January-February, 2013

22. Akita S: New strategies for wound healing andregenerative medicine in plastic Surgery. 3rdResearch and Reconstructive Forum, KoreanSociety of Plastic and Reconstructive Surgeons, invited lecture, Daegu, Korea, May, 2013

23. Yoshida S, Hamada Y, Hamuy R, Yoshimoto H, Nakashima M, Hirano A, Akita S: Adipose-derivedstem cell transplantation for therapeuticlymphangiogenesis in a mouse model oflymphedema. SAWC/WHS annual meeting, Denver, USA, May, 2013

24. Akita S: Advanced wound care in difficultwound (radiation injury, vascular anomaly). Recent advances in wound care management, invited lecture, Bangkok, Thailand, June, 2013

25. Akita S: New strategies for wound healing (stem cells, growth factors, artificial dermisand etc). Recent advances in wound caremanagement, invited lecture, Bangkok, Thailand, June, 2013

26. Akita S: New strategies for wound healing (stem cells, growth factors, artificial dermisand etc.). Recent advances in wound caremanagement and diabetic foot management, invited lecture, Kaohsiung, Taiwan, June, 2013

27. Akita S: Advanced wound care in difficultwound (radiation injury, vascular anomaly). Recent advances in wound care management anddiabetic foot management, invited lecture, Kaohsiung, Taiwan, June, 2013

28. Akita S: New perspectives in wound healing andwound care. The 2nd international symposium forwound repair and treatment development National chronic wound care training program, lecture, Beijing, China, June, 2013

29. Akita S, Yoshimoto H, Houbara S, Hirano A: Adipose-derived regenerative cells increase fattissue volume in lipoatrophy and successfullyhealintractable wounds. 3rd annual meeting of CellSociety, guest speaker, San Diego, September, 2013

30. Akita S: Wound care delivery in the AsiaPacific Region (stem cells, growth factors, artificial dermis, etc.). International WoundConference 2013, invited lecture, Kuala Lumpur, Malaysia, October, 2013

31. Akita S: Asian wound care, where are we now?International Wound Conference 2013, invitedlecture, Kuala Lumpur, Malaysia, October, 2013

32. Hayashida K, Fujioka M, Akita S: Innovation inwound healing: human recombinant basicfibroblast growth factor (bFGF).

InternationalWound Conference 2013, invited lecture, KualaLumpur, Malaysia, October, 2013

33. Hayashida K, Fujioka M, Akita S: Negativepressure wound therapy NPWT) for pressureulcers. International Wound Conference 2013, invited lecture, Kuala Lumpur, Malaysia, October, 2013

34. 秋田定伯、吉本浩、芳原聖司、林田健志、平野明喜：脂肪幹細胞と放射線障害、脂肪変性疾患に対する小胞体ストレス及 bystander response. 第5回日本創傷外科学会、パネルディスカッション、京都、7月、2013 年

35. 秋田定伯、吉本浩、吉田周平、林田健志、平野明喜：我が教室のケロイド研究と今後の展開-Where are we going?-. 第8回瘢痕・ケロイド治療研究会、パネルディスカッション、札幌、8 月、2013 年

36. 秋田定伯、吉本浩、吉田周平、林田健志、平野明喜：培養脂肪幹細胞の細胞分制御と小胞体ストレス増強とアポトーシス誘導. 第 22 回日本形成外科学会基礎学術集会、シンポジウム、新潟、11 月、2013 年

37. Akita S, Yoshimoto H, Yamanobe Y, Murakami R:Post-operative management by telemetry/tele-medicine system. 6th International Workshopon Wound Technology, Paris, France, January, 2014.

38. Akita S: Global perspectives in wound care. 3rdPhilippine Wound Care Society annual meeting, guest speaker, Mandaluyong, Philippine, February, 2014

39. Akita S: Innovative products and new practicesin wound care. 3rd Philippine Wound Care Societyannual meeting, guest speaker, Mandaluyong, Philippine, February, 2014

40. Akita S: Stem cell research in wound healing. 3rd Philippine Wound Care Society annual meeting, guest speaker, Mandaluyong, Philippine, February, 2014

41. Akita S: Esthetic and functional burn woundmanagement and regeneration. Middle East woundsand scar meeting, plenary session, Dubai WorldTrade Center, Dubai, UAE, March, 2014

42. Akita S, Yoshimoto H, Yamanobe Y, Murakami R:Urgent alarming system by percutaneousmonitoring system in free flap reconstruction. Middle East wounds and scar meeting, plenarysession, Dubai World Trade Center, Dubai, UAE, March, 2014

43. Akita S: Limitation of treating malignantwounds. Middle East wounds and scar meeting, Dubai World Trade Center, Dubai, UAE, March, 2014

44. Akita S: Face, extremities, skin, soft tissueand bone, tumors, wounds and scars-benign ormalignant?-. Middle East wounds and scarmeeting, Dubai World Trade Center, Dubai, UAE, March, 2014

45. Akita S: Guidelines in practice and theory inwound care-Japanese plastic surgeon's 3-yeartrait. Middle East wounds and scar meeting, Dubai World Trade Center, Dubai, UAE, March, 2014

46. Akita S: Stem cell research in wound healing. visiting professor at Grand rounds, atMontefiore Hospital, Albert Einstein collegeof medicine, March, 2014

47. Akita S: Advanced wound care in difficult woundsand new strategies for wound Healing. The ThaiSociety of Burn and wound Healing, invited lectureBangkok, March, 2014.

48. Akita S, Yoshimoto H, Houbara S, Hirano A:Analysis of efficacy of mesenchymal stem cellin pathologic environment. SAWC/WHS annualmeeting, Orlando, Florida, April, 2014

49. Yoshida S, Yoshimoto H, Akita S, Hirano A:Wound healing and angiogenesis throughcombined use of a vascularized tissue flap andadipose-derived stem cells in a rat hindlimbischemia model. SAWC/WHS annual meeting, Orlando, Florida, April, 2014

50. Akita S: Stem cell and radiation. The 12thKorea-Japan Congress of Plastic and ReconstructiveSurgery, panel discussion, SongdoConvensia, Incheon, Korea, May, 2014

51. Akita S: Why is the radiation injury troublesome?visiting professor lecture, Brigham and Women'shospital, Harvard University, July, 2014

52. Akita S: Global perspectives in wound care/urgentalarming monitoring system by percutaneous laserin free flap reconstruction: introductorytechnology related to post-operative woundcare system. Taiwan Society for Burn Injury andWound Healing annual meeting and woundsymposium –New century of wound care andManagement, and innovation for best wound care–, invited lecture, Taipei, Taiwan, August, 2014

53. Akita S: Advanced wound care In difficultwound (ischemic condition observed in PAD, vascular anomaly and scar tissue). TaiwanSociety for Burn Injury and Wound Healingannual meeting and wound symposium –New centuryof wound care and Management, and innovationfor best wound care–, invited lecture, Taipei, Taiwan, August, 2014

54. Akita S: How to integrate the new technologyinto solving difficult wounds. Annual meetingof Chinese Tissue Repair Society, invitedlecture, Wuhan, China, August, 2014

55. Akita S: Advanced wound healing with technologydevelopment and through regenerative medicine. New technology in burns and wounds treatment forum, invited lecture, Ruijin Hospital, Shanghai, China, September 2014

56. Akita S: Science behind stem cell therapy. Joint conference of the Hong Kong society ofdiabetic limb care, world union of woundhealing societies and Asian academy of woundtechnologies, invited lecture, Hong Kong, China, October, 2014

57. Akita S: Advanced wound care methods. Jointconference of the Hong Kong society of diabeticlimb care, world union of wound healingsocieties and Asian academy of woundtechnologies, invited lecture, Hong Kong, China, October, 2014

58. Akita S: How to integrate new technology into woundhealing. 3rd international symposium of wound repairand treatment development National chronic woundcare training program, lecture, Peking University, Beijing, China, October, 2014

59. 秋田定伯：創傷治癒、瘢痕、ケロイド、肥厚性瘢痕. 第57回日本形成外科学会、プレスカンファレンス、長崎、4月、2014年

60. 秋田定伯：ガイドラインの作成と査読を通じて. 第57回日本形成外科学会、特別企画、長崎、4月、2014年

61. 秋田定伯、吉本浩、千住千佳子、平野明喜、藤岡正樹、林田健志、西條広人、桑原郁：Wound bedpreparation を含めた創傷治療技術開発の基

盤的教育プログラムの開発. 第 57 回日本形成外科学会、ミニシンポジウム、長崎、4月、2014年

62. 秋田定伯、林田健志、吉本浩、木下直志、吉田周平、平野明喜:【熱傷基礎研究の最前線】急性放射線障害のメカニズムと治療方法の開発. 第 40 回日本熱傷学会、パネルディスカッション、埼玉、6月、2014年

63. 秋田定伯、吉本浩、吉田周平、林田健志、平野明喜:【瘢痕の低侵襲治療】瘢痕を最小限度に導く工夫と分子基盤. 第6 回日本創傷外科学会、パネルディスカッション、高松、7月、2014 年

64. 吉田周平、Rodrigo Hamuy、吉本浩、秋田定伯、平野明喜:リンパ浮腫モデルにおける脂肪由来幹細胞を用いたリンパ管再生療法. 第 23 回日本形成外科学会基礎学術集会、シンポジウム、松本市、10月、2014 年

65. 秋田定伯:創傷治癒(基礎). 第23回日本形成外科学会基礎学術集会学術講習会講師松本、10月、2014 年

河原和夫

(1) 原著論文

1. Fujimoto T, Kawahara K, Yokozeki H:Epidemiological study and considerations ofprimary focal hyperhidrosis in Japan : Fromquestionnaire analysis. Journal of dermatology2013; 40: 1-5

2. Tareque MI, Hoque N, Islam TM, Kawahara K, Sugawa M: Relationships between the activeaging index and disability-free lifeexpectancy: A case study in the Rajshahidistrict of Bangladesh. Canadian Journal on Aging. Okamoto S, Kawahara K, OkawaA, Tanaka Y. Values and risks of second opinion in Japan' suniversal health care system. Health Policy inpublication, January 2013.

3. Okamoto S, Kawahara K, Okawa A, Tanaka Y :Values and risks of second opinion in Japan' suniversal health care system. Health Policy inpublication, January 2013.

4. 鶴岡麻子、河原和夫、米井昭智、牧野憲一、矢野真、橋本廸生、長谷川友紀: 経管栄養法における安全管理の状況と提言『経管栄養チューブの安全確保』の順守状況. 医療の質・安全学会誌第7巻第1号、pp. 10-18, 2012.

5. Kawai T, Kawahara K: A suggestion for changingthe Act on Welfare of Physically DisabledPerson regarding total hip and knee arthroplastyfor osteoarthritis. (Japanese Journal of JointDiseases. Vol 31(1), pp. 21-32、2012.)

著書

1. 伊藤雅治、曽我紘一、河原和夫、成川衛、服部和夫、小田清一、皆川尚史、遠藤弘良、後藤博俊、杉山龍司、黒川達夫、西山裕、増田雅暢、青木良太、八木春美、田仲文子、椎名正樹、玉木武、白神誠、藤田利明、藤村由紀子: 国民衛生の動向. Vol. 59(9)2012/2013 : p. 174-186、財団法人厚生統計協会. 2012.

2. 正岡徹、石井正浩、遠藤重厚、斧康雄、金兼弘和、河原和夫、笹田昌孝、佐藤信博、白幡聡、祖父江元、比留間潔、藤村欣吾、三笠桂一、宮坂信之、森恵子、山上裕機: 静注用免疫グロブリン製剤ハンドブック. 血漿分画製剤の製造工程と安全性確保 ; p. 151-158. 2012. メディカルレビュー社.

(2) 学会発表

1. 菅河真紀子、河原和夫、杉内善之、野崎慎仁郎、上原鳴夫: アジア諸国における血漿分画製剤の製献血推進のための効果的な広報戦略等の開発に関する研究 27 造体制およびわが国の国際貢献の可能性について (第1報). 第37回日本血液事業学会総会、札幌市、 2013.

2. 河原和夫、菅河真紀子、杉内善之、野崎慎仁郎、

上原鳴夫: アジア諸国における血漿分画製剤の製造体制およびわが国の国際貢献の可能性について（第2報）. 第37回日本血液事業学会総会、札幌市、2013.

3. 九州の離島居住者の献血特性に関する研究. 河原和夫、菅河真紀子、 Md. Ismail Tareque、TowfiquaMahfuza Islam、竹中英仁: 36 回日本血液事業学会総会、仙台市、2012.

4. 河原和夫、菅河真紀子、Ismail Tareque: 地図情報システムを用いた輸血用血液製剤搬送時間の地理的特性の分析. 35回日本血液事業学会総会、さいたま市、2011.

5. 菅河真紀子、河原和夫、Ismail Tareque、池田大輔、島陽一、竹中英仁: 九州ブロックにおける献血者の特性について. 35回日本血液事業学会総会、さいたま市、2011.

田中純子

(1) 著書

1. 田中純子、片山惠子: 日本における肝癌の疫学的動向・概論、日本臨牀増刊号最新肝癌学、2015;73(1):51-58.

2. 田中純子: HCV 感染の疫学・感染経路、HEPATOLOGYPRACTICE、2014;3:15-22.

3. 田中純子: HCV 感染の疫学の現況と今後、肝疾患 2014-2015 Review、2014:27-33.

4. 田中純子: 疫学的視点からみた肝炎対策-肝炎の地域連携、公費助成制度-、診断と治療、2014;102(11):1681-1688.

5. 片山惠子、田中純子: 肝炎・肝癌の疫学、Annual Review 消化器、2013:88-93.

6. 田中純子: B型肝炎に関する疫学調査の最新情報、B 型肝炎最新治療コンセンサス（別冊・医学のあゆみ)、2013:5-12.

7. 田中純子、片山惠子、松尾順子: わが国におけるHBV感染の疫学、de novo B型肝炎、2013:14-29.

8. 片山惠子、田中純子: ウイルス肝炎最新の疫学、診断と治療、2013;101(9):1287-1292.

9. 田中純子: HBV 感染症のインパクト、HEPATOLOGYPRACTICE、2013;1:27-35.

10. 田中純子、片山惠子、疫学、新しい診断と治療のABC 44 消化器6 肝硬変、2013:20-30.

論文

1. Tanaka J, Katayama K, Matsuo J, Akita T, AsaoT, Ohisa M, Tsuchiya S, Yorioka N: Theassociation of hepatitis C virus infection withthe prognosis of chronic hemodialysispatients: a retrospective study of 3,064patients between 1999 and 2010, Journal ofMedical Virology, in press.

2. Ohisa M, Kimura Y, Matsuo J, Akita T, MatsuokaT, Sakamune K, Katayama K, Do H S, Miyakawa Y, Tanaka J: Estimation number of patients withliver disease related to hepatitis B or C virusinfection based on the database reconstructedfrom the medial claim from 2008 to 2010 in Japan, Hepatology Research, doi: 10.1111/hepr.12497.

3. Katayama K, Sato T, Do H S, Yamada H, TabuchiA, Komiya Y, Matsuo J, Nakashima A, Ohisa M, Akita T, Yorioka N, Miyakawa Y, Yoshizawa H, Tanaka J: Hepatitis B virus infection inhemodialysis patients in Japan: prevalence, incidence and occult HBV infection, Hepatology Research, doi: 10.1111/hepr.12492.

4. Yamada H, Fujimoto M, Somana S, Lim O, Hok S, Goto N, Ohisa M, Akita T, Matsuo J, Do S H, Katayama K, Miyakawa Y, Tanaka J:Seroprevalence, genotypic distribution andpotential risk